

## 塩屋埼灯台

精霊 1

精霊 2

裕子

栄二郎

イヤホンガイドの説明者

イヤホンガイドを利用する観光客たち

精霊 1 と精霊 2 が上空を飛んでいる。

精霊 1 「精霊よ、灯台が見えてきました」

精霊 2 「慌てないで、精霊よ。久々に飛行するときはずっと、風が強い。」

精霊 1 「まぶしい、ほら、山の影が海の中までのびている」

精霊 2 「その光は傾き、斜めに落ちていた。陽はもはや中天を離れていた。」

精霊 1 「青い海に白い灯台。とても綺麗。」

精霊 2 「3月の光は雲に射しかかるとみれば、燃えたち、雲は薄く燦めきわたり、何ものも足を入れ得ぬ燃えさかる島となった。ここでは出店がお土産ものを売っていた。駐車場の向こう側は小さな港だった」

精霊 1 「車が 1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28、29、30、31、32、33。なにかの歌が聞こえるようです」

精霊 2 「石碑の周りには人々が集まり、また一つ、今一つと雲はつぎつぎに光を浴び、果てはその下に横たわる波までも、揺らぐ青い海面を処さだめず飛び交う光る雲たちの、燃える羽毛の<sup>なげや</sup> 投矢に射抜かれた。」

精霊 1 「灯台までは、みんな、あの階段を登るのですか？」

精霊 2 「そう、この丘を登る道はひとつしかない。」

精霊 1 「随分急な崖。ほんとうだ、向こう側を登っている。」

精霊 2 「波が渚に砕けた。」

二人、景色を見晴らす。

精霊 1 「なぜここに灯台があるのですか？」

精霊 2 「なぜ、ここに、」

精霊 1 「なぜ」

精霊 2 「灯台は、暗礁を避けろというメッセージを伝えていた。波は互いに馳せ集まり、背をかがめては崩れ落ちた。<sup>ほとぼし</sup> 迸り飛ぶのは石や<sup>つぶて</sup> 礫。波は、岩の周りを洗い、流れた。飛沫は高く舞い上がり、これまで乾いていた<sup>ほらあな</sup> 洞穴の壁に飛び散り、」

精霊1「暗礁って」

精霊2「あのゆるやかに曲がった波打ち際まで海の底からそびえている山」

精霊1「工事が着々と進んで、ずっと向こうからこちらまで、海岸線がまっすぐにのびてきます。まっすぐすぎてこの丘も私たちも、突き抜けている。薄磯<sup>うすいそ</sup>の海べにあった小さな集落は、白く光る砂をかけた四角い盛り土の連続です。もっと上から見てみましょう」

精霊2「高く上がるごとに風は勢いを増す。」

精霊1、吹き飛ばされる。

精霊2「戻っておいで精霊よ。戻っておいで。」

精霊2、ひとりになる。

精霊2「私たちは国立美術館の展示室に腰を下ろして、こなごなになった断片を拾い上げている。これは私の弔いの儀だ。私たちには葬式はない。ただ、個人的な挽歌があるだけだ。結末はなく、各々別々の、激しい感動があるのみだ。これまで言われてきたことは一切私たちの場合にはあてはまらない。」

裕子、取っ手のついた鍋を二つ、下げて、官舎の戸口に入る。

テーブルの上を片付けて、食器を別室から持ってくる。

鍋の中身をテーブルでよそり始める。

食事の準備を進める。

裕子「お父さん」

別室に呼びかけるが返事がない。

2人前の箸とコップを台所からもってきてセットする。

精霊2、裕子の様子をしばらく見ている。

精霊1、上空に戻ってくる。

精霊1「見えますか？ 驚いています。灯台の一番上には大きなレンズのついたライトがあると思っていました。」

精霊2「そのレンズは最新式のフランス製フレネルレンズで、ばらばらに設計されたガラスの断片を組み合わせて光の彎曲<sup>わんきょく</sup>率を調整する。したがって従来のガラスレンズに比べて地震の揺れや火災の熱などに対する強度は非常に高く、狭い面積と少ない質量で今までの以上の明るさの光を投光することが可能になる。安全性の高さはもちろん耐久性の高さと比例しており、維持管理にかかる経費や、運転そのものの燃料も効率化できる。」

精霊1「ええ、昔は。今は LED の点滅式の小さいものが一つ、窓の外から見えました。窓は潮風で曇っているけど。」

精霊2「投光室の窓辺にはよく子供達の下から雪の玉を投げている。投げてもとどかない

ことをわかっていて。戸口を入るとすぐに小さな部屋が二つあって、そこには灯台守たちが働いていた。灯台長の家族と若い職員1名が、丘の中腹の官舎に共同生活をしていた。」

精霊1と2、上空から官舎へおりたつ。

裕子「お父さん」

しばらく返事がない。

裕子「お父さん。外のタンク、水がもうないよ。」

栄二郎、別室から入ってくる。

一度外へ出てタンクを確認して戻って来る。

裕子「砂が詰まった。といのところに。」

栄二郎「なに、あそこまでのぼって見たの。」

裕子「うん。今朝三橋さんとはしごかけてみた。といの鉄板が少しめくれているところがあって中が半分ぐらい砂で埋まっていたから水が途中から全部外に流れていた。ほうれんそう」

栄二郎「味噌汁にか」

裕子「うん、さっき河合さんにいただいたやつ」

裕子と栄二郎、食べ始める。

裕子「お水、あとで下からもらってこようか？」

栄二郎「三橋君が戻ってからでいい。2、3日はあれでもつか。」

裕子「わかんない。たぶん。」

栄二郎「明日には少し降るよ、台風が近づいているから。」

裕子「お母さん、今日、寝てる間になんか言っていた。」

栄二郎「先生は」

裕子「同じ薬でもうしばらく様子を見ますって。なんか、ちょっと目開けて、卵焼きがなんとなくかいていった。」

栄二郎「卵焼き？」

裕子「うん、夢の中のこと。（寝言の真似をして）『せっかく卵が3つもあるのに、目玉焼きじゃなくて卵焼きにするの』だって」

栄二郎笑う。

裕子「毎日ねてばかりで猫みたい。猫よりねてる。」

栄二郎「やめなさい」

裕子「三橋さん、いつ戻ってくるの？」

栄二郎「来週の月曜だよ。8日か？」

裕子、壁のカレンダーを振り返る。

裕子「うん。今朝タンクみた後、急いで出て行った。」

栄二郎「学会さ。名古屋であるのにどうしても行きたいんだと」

裕子「なんだ、そうか。、、、そんなこと言ってなかったけど」

栄二郎「本人に聞いたら言ったさ。そのぐらい。聞いたのか」

裕子「聞いてない」

栄二郎「だからだろ。聞かなきゃ言わんよ、誰だって」

裕子「いいでしょう、どっちだって」

裕子、立ち上がり、別室へ食器を運ぶ。

栄二郎「裕子。河合さん、いつきたの？」

裕子、戸口の精霊たちに気がつき、食器を置いてからそちらへいく。

裕子「どうぞ、見学ですか。」

精霊1「はい、上の投光室まで行くことはできますか」

裕子「はいどうぞ。東京から、ハガキの方ですよね。」

精霊1「いえ」

裕子「あ、はあ、違うんですか」

栄二郎「いや、どうも。いらっしやい。お早いですね。」

裕子「東京の方とちがうんですって。ハガキで申し込んでらっしゃらないって。」

栄二郎「あそう。」

精霊1「はい」

栄二郎「あの、あとで15人ほど東京からくる予定なんですけど、まあ、じゃあそれまで。」

精霊1「ありがとうございます。」

栄二郎「(裕子に)上の鍵開けてくるから、ご案内して」

栄二郎、靴をはいて先に官舎の戸口を出て灯台の投光室へ向かう。

裕子「少しおまちください」

裕子は所定の用紙とペンを持ってくる。

裕子「こちらへ、住所、氏名、生年月日を記入してください。」

精霊1「私たち精霊なんです」

裕子「え、ほんとうに？」

精霊1「はい。だから、これは、かけません」

空欄の用紙とペンを受け取る裕子。

高台の灯台と、そこに向かう栄二郎をゆっくりと目をあげ、見あげる裕子。精霊たちも

同じ方向を振り向く。

裕子「じゃあ何が見えます？ここから」

精霊2「海や。灯台。灯台に続く道を登る人。水平線。海岸。洗濯室の屋根と貯水タンク。土埃。風になぶられて背がひくいままのからたちの木。」

裕子「それだけですか」

精霊1「ええ」

裕子「何か他にちがうところはありませんか。」

精霊1「ちがうところ」

裕子「私たちに見えないものが見えたりしないのですか」

精霊1「さあそれは」

裕子「あなたがた精霊は私たち人間が、なにか、どうやってもわからないことを教えてくれるんですよ。」

精霊1「、、、」

裕子「私たちになにか大切なことを知らせに来てくれたんですよ」

精霊1「難しいですね」

裕子「難しい？ どうして？」

精霊2「答えられません」

裕子「それでは普通の人間と同じです」

精霊2「、、、」

裕子「どうして自分たちが精霊だと言えるのですか？」

精霊2「私たちは呼ばれて来たんです。呼ばれてここでこの言葉を話しています。それだけなのです」

裕子、しばしそのまま。

精霊2「考えてください。あなたはとうですか」

裕子、顔を上げる。

裕子「、、、この灯台になにか用があるんですか？」

精霊2「とくに用事や目的はありません。いつも通り呼ばれたところで現れたのです。そして、もうすぐ呼び声は消えて私たちは解体します。あなたも同じです」

裕子「私もですか」

精霊2「ええ。私もあなたもこの海辺の景色もすべて解体して、ここにはなにもなくなります。」

裕子「残るものは？」

精霊2「なにもありません。」

裕子「確かに。なにもありません」

裕子、戸口へ行き

裕子「灯台で父が待っています」

精霊たちと連れ立って、官舎から灯台へ、丘の道を上がる。

少し歩くと精霊2が突然倒れる。

完全に脱力した精霊2を、裕子と精霊1で協力して、適切な場所に運び安置する。

精霊1「投光室まで登りますか」

裕子「はい。悲しみに引き裂かれると、心配ができなくなる。」

精霊2を残し、丘の道を登っていく。

灯台の内部に入ると栄二郎が待っている。

栄二郎「いらっしゃい。ここからどうぞ」

精霊1、上を見上げて。

精霊1「全部で何段ありますか？」

栄二郎「200段ぐらいでしょうか。よく聞かれますよ。でも数える気にはなれませんね。毎日登るんですから」

栄二郎、笑っている。

精霊1と栄二郎、裕子、螺旋階段を登る。

栄二郎「この灯台は明治32年にできました。当時はれんが造りの建物で、海拔は73メートル。沖合40キロまでこの灯台の光は届きます。このまえの11月5日の福島県沖地震で基礎から破損したので、今の鉄筋コンクリートのものに一昨年作り変わりました。投光器のレンズは最新式のフランス製フレネルレンズで、ばらばらに設計されたガラスの断片を組み合わせ、光の<sup>わんきょく</sup>彎曲率を調整しています。従来のガラスレンズに比べて地震の揺れや火災の熱などに対する強度は非常に高く、狭い面積と少ない質量で今まで以上の明るさの光を投光することが可能になりました。安全性の高さはもちろん耐久性の高さと比例しておりまして、維持管理にかかる経費や、運転そのものの燃料も効率化しています。」

投光室に着く。バルコニーにでる。

栄二郎「ここから、回廊に出られます。風が強いので気をつけて。ぐるっとまわって一周できますよ。」

精霊1「もう陽が沈んでいく。山の影が海の中までのびている」

栄二郎「あ、東の水平線の向こうから船が来る、見えますか？」

精霊1「いえ、どこです」

栄二郎「ほら、あそこに」

精霊1「南の方ですか？」

栄二郎「いえ、まっすぐ東です。船室の上の方だけに光が当たって、ガラス窓が反射しています」

精霊1「東には何も見えない」

栄二郎「だんだん船体が現れてきています。ほら、もう形がわかる。」

精霊1「いえ、あいかわらず。遠くにはもやがかかって」

栄二郎「点のようだったものが、いまは船になった。ほら、東に」

精霊1「あ、本当だ。」

裕子「随分大きな船」

精霊1「そうだ、ここで水平線を見ながら地球が丸いことを子供達に説明しているときに、沖から大きな船がこちらにやってきたことがあった。思い出した。ちょうどあんなふうだった。」

裕子「浅瀬の手前で旋回している」

精霊1「はじめは随分大きいから、蜃気楼か何かじゃないかと思った。近くの港に入れるほどの大きさではないし、客船か海軍の輸送船のようにも見えた。」

栄二郎「港の水深が足りないから着岸はできないだろう。しばらく沖にとどまるつもりだ」

精霊1「夜になると沖にどんなに大きな船が通っても、姿は見えない。だからここから光の合図を送って無事に通り過ぎよう祈ってきた。船のなかの人たちのことを想像しながら」

裕子「お父さん、この人精霊なんですって。」

精霊1「大きな船のなかにはきっと、もうだれも使わないボールルームがあって鏡が静かに光っている。船員も乗客もじっとだまって暗闇に溶けていく波を窓のなかから見つめている。灯台から差し向けた光の一筋が船の近くに届くとき、海面と彼らの顔を一瞬に照らし、また闇に戻る」

栄二郎「ひとつききたいんだが、船が沈むとき、船室のなかはどうなっているんだい。聞くのは良くないか？ 私はここから事故が起こらないように毎日光を投げかけていますが、実際に事故が起こったらどうなるのかを知りたいといつも思っているんです。」

精霊1「冷たい水に押し流されて、身動きはとれません。そして誰も助けには来てくれませんでした」

栄二郎「部屋にはどのように水が入ってくるのですか」

精霊1「床が傾き、水圧に耐えられない窓や扉の隙間から水が噴き出します。足元は徐々に水につき、テーブルの上などの少しでも高い所に登ろうとしますが、家具も斜めになっていずれ浮きはじめます。足場を失い、ものがおしよせ自由に体を動かすことはできません。少し時間が経つと流れが急に早くなりました。」

栄二郎「救いは？」

精霊1「私への呼び声は消えてしまった。」

裕子「どこへいくんです」

精霊1「冷たい海の底へ」

精霊1、灯台の上から海に飛び込む。

精霊1、精霊2と並んで海の底から海面を見上げている。

精霊1「魚、海草、船、全部影になって動いている」

精霊2「ここから見ると、地上には光しかないようだ」

精霊1「ひとつびとは、水の中で目を開けるのは得意でしたか？」

精霊2「いや。開けたとしても、こんな光景は見えなかつただろう」

精霊1「もうなにも聞こえない」

動かなくなる二人。

精霊を見送った栄二郎と裕子は再び食卓につく。

裕子「河合さん、今朝お母さんの病院で会った。お祭りのときに挨拶できなかったからって、一旦家にもどってさっきほうれんそう、持ってきてくれたの」

栄二郎「あそう、悪かったね、また留守で」

裕子「このハガキの人たち、汽車が遅れてるのかな」

栄二郎「ああ」

裕子「あまり遅れると帰りのバスがなくなるね」

栄二郎「日暮れまでには来るだろう。」

イヤホンガイドの一団がやってくる。

場合によっては精霊も一団に加わる。

説明者は胸元のピンマイクに向かって小さな声でつぶやくように話している。

ばらばらと空間にちらばる一団の人々。

裕子と栄二郎は順次、食器を片付け、去る。

説明者「みなさん、外に比べると、ちょっと涼しいですね。一階部分はいま、資料館になっていますから、自由にみてください。どうしましょう、いったん解散にして、ええ、そうですね。解説は私しますから、登りたい人は上まで登ってもらって。いい景色ですよ。あ、この、イヤホンの電波、壁は越えられませんから、ご承知ください。上に行ったら私の声は聞こえなくなりまーす。ちょっと急なんで、気をつけてゆっくり登ってもらって、またここに20分後11:40集合で、いいですかね。」

参加者、各々だまっとうなづく。

説明者「はい、それじゃ。こちらのミニチュア、昔は官舎もあったんですが、いまは灯台と守衛室だけです。映画の舞台にもなったんですよ。ここ。木下恵介監督の『喜びも悲しみも幾歳月』って、ご覧になったかた、ありますか」

てんでばらばらの方向を向いて散らばって好き勝手に展示を見ている集団の中の2人ほどが手を挙げる。

説明者「あー、はいはい、やはりご年配ですね。」

参加者全員、同時にどよっと笑う、もしくははにやける。

説明者「もう、60年前の映画ですからね。この間BSでやってたので私もそれで初めてみました。ラストの全国の灯台をめぐるシーンが圧巻でしたけどもね。そうやって灯台守りさんたちが灯台を守っていた時代がありました。灯台守りというと、堅物のおじいさんがひ



とりきりで猫と暮らしているイメージですが、これが現実はちがったんですね。実は国の職員の方々が中央から派遣されて、家族と一緒に転勤してきていたんですね。ですから灯台勤務の職員は大学出のエリートです。灯台長さんと呼ばれて地域の人々からは校長先生と並んで、なにかと行事なんかと呼ばれたりしたそうですよ。ええ。」

年表のパネル展示のエリアに移動する説明者。

説明者「明治時代につくられたレンガづくりの灯台は昭和13年の福島県沖地震でこわれてしまったので、鉄筋コンクリートになりました。まだ戦前のことですので、当時はかなり近代的な最先端のものでした。そこにある、おっきいですね～、それ、フランス製のフレネルレンズというレンズです。これもそのころ導入されました。そのあと、この灯台は第二次大戦中、アメリカ軍よりたびたび大きな爆撃を受けて、この官舎で暮らしていた職員の方も殉職しました。戦後は、無線やサイレンに新しい技術がどんどん導入され1993年平成5年にこの灯台は無人化されました。灯台守りさんたちは常駐しないようになった、ということですね。6年まえの東日本大震災の影響では9ヶ月間の消灯を余儀なくされましたが、また、いまのように本来の灯台としての機能をとりもどしています。しかし、あれですね。灯台一つにも本当に歴史のながれというか、物語がきざまれているんだなとここへ来るとおもいます。」

話しながら、参加者と説明者、ばらばらと出て行く。

おわり